

# 児童・生徒の情報リテラシーの認知的基礎に関する研究

—情報モラル課題と情報活用能力、批判的思考態度の関連—

沖林 洋平 神山 貴弥 西井 章司 森保 尚美  
川本 憲明 鹿江 宏明 森 敏昭

## 問題と目的

本研究の目的は、情報リテラシー (information literacy) の認知構造と機能に関する基礎的検討を行うことである。情報教育あるいは情報化教育において、情報リテラシーという語は、ひとつのキーワードとして位置づけられている (永井・清水・奥田, 2005; 齋藤・三輪, 2001, 2002)。

このような、教育における実践的な問題を検討する際のキーワードの概念の多様性は、情報教育あるいは情報化教育における情報リテラシーに限ったことではない。例えば、近年の市民教育としての生涯教育場面や、大学等における高等教育課程において、批判的思考 (critical thinking) の重要性が指摘されるようになり、批判的思考の認知的基盤に関する理論的研究と教育実践への開発研究が進められるようになっていく (例えば、道田, 2003; 平山・楠見, 2004)。しかし、その中心的概念としての批判的思考に関しても、研究者によって様々な概念的定義や操作的定義がなされており、研究間の一致をみるものではない。情報リテラシーと批判的思考は、内包する概念的定義は異なるものであるが、日常生活において求められる能力としての両者の機能に大きな違いはない。

## 情報リテラシーと批判的思考の概念的定義

情報リテラシーの概念的定義には、「情報機器やネットワークを活用して、情報やデータを取り扱う上で必要となる基本的な知識や能力 (情報マネジメント用語辞典 <http://www.atmarkit.co.jp/im/terminology/>)」がある。

一方、意思決定や判断、あるいは情報機器利用に関する批判的思考の概念的定義を規定した先行研究としては、以下のようなものが挙げられる。

まず、道田 (2000) は、日常生活における情報機器

利用の使用に関わる思考の態度・技術・知識が構成する批判的思考の機能を「批判的な態度 (懐疑) によって解発 (リリース) され、創造的思考や領域固有の知識によってサポートされる論理的・合理的な思考」であると概念的に定義づけている。また、情報機器利用に対する具体的行動様式としては、「これらの要素に基づいて行われる、総合的な活動としての「良質の思考」が批判的思考である。日常における思考・判断だけでなく、科学をはじめとする学術研究、医学における診断、事件捜査や探偵小説に見られる推理など、さまざまにある良い思考を総称したものが批判的思考なのである。」としている。

次に、教育認知心理学的見地から批判的思考態度を開発した平山・楠見 (2004) は、教育認知心理学や社会心理学における批判的思考に関する先行研究 (廣岡・小川・元吉, 2000; Kadash & Scholes, 1996; 神山・藤原, 1991, Sa. West, & Stanovich, 1999) を概観し、次の2つの問題点を見出している。ひとつは、批判的思考態度の構造が十分に明らかにされておらず、それらの測定するための尺度の整備も十分ではないことである。もうひとつは、批判的思考の態度とさまざまな情報に基づく判断との関係性については検討されているものの、判断の結果としての結論を導出するプロセスについてはほとんど検討されていないことである。このような問題意識に基づき、平山・楠見 (2004) は、批判的思考態度尺度を開発した。批判的思考態度は、「複雑な問題について順序だてて考えることが得意だ」「考えをまとめることが得意だ」「物事を正確に考えることに自信がある」などから構成される「論理的思考への自覚」、「いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい」「生涯にわたり新しいことを学び続けたいと思う」などから構成される「探究心」、「いつ

Yohei Okibayashi, Takaya Koyama, Shoji Nishii, Naomi Moriyasu, Noriaki Kawamoto, Hiroaki Kanoe, Toshiaki Mori: The research about the basic aspects of information literacy among elementary and junior high school students: The relationship between information morality task, practical use of information, attitude for critical thinking

も偏りのない判断をしようとする」「物事を決めるときには、客観的な態度を心がける」「一つ二つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする」などから構成される「客観性」、「判断をくだす際には確たる証拠の有無にこだわる」「判断をくだす際には、できるだけ多くの事実や証拠を調べる」などから構成される「証拠の重視」の4因子から構成されることが明らかとなった。さらに、対立する主張を読んだ上で自分なりの結論を導出する課題の成績と批判的思考態度尺度の得点の関連を検討することで、批判的思考態度と結論導出のプロセスの検討を行った。その結果、結論導出プロセスには、批判的思考態度の中でも「探究心」が重要な役割を果たすことを明らかにしている。

以上の研究成果から明らかにされたことは、以下のようにまとめられる。すなわち、情報機器の状況に応じた適切な利用場面や、対立する主張から自分なりの結論を導出するというような問題解決のような課題状況においては、まず、創造的思考や領域固有の知識によってサポートされる論理的・合理的な思考としての批判的思考態度や批判的思考技術は有効に機能するということである。そして、問題解決のためには、批判的思考態度の中でも「いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい」「生涯にわたり新しいことを学び続けたいと思う」というような性質を持つ「探究心」が重要な役割を持つことである。このように、熟考を求められる日常的な問題解決場面においては、態度に裏打ちされた批判的思考の技術の適用が重要であることが分かるだろう。

一方、情報リテラシーについても、近年、情報教育や教育工学的見地から研究が進められるようになっていく。情報リテラシーという概念に関する研究が進められるようになった歴史的背景としては、リテラシーという語の持つ概念的定義の変容を無視することはできない。

佐藤（2003）によれば、リテラシーはそもそも多義的な概念であるとされている。この概念の内包を最小に限定すれば「読み書き能力（=識字能力）」と定義され、最大に解釈すれば「オーラリティ（口承文化）」に対する「書字文化（文字を媒介とする文化）」と定義される。しかし、佐藤（2003）の同論文における、「教育が「書字文化」を基盤として成立していると言っても、常識を述べているだけであり、「リテラシーの教育」については何も行っていないに等しい」という問題提起は、リテラシー教育が、近年重要な教育課題として議論されるようになってきているのかについて再検討することの重要性を示唆するものであると考えられる。

佐藤（2003）によれば、リテラシーという語が教育

概念に登場したのは、公教育が制度化された19世紀末のことである。その時代のリテラシーの一般的な概念的定義は、「共通教養」としての「読み書き能力」のことを意味していたとされる。しかし、20世紀、そして21世紀に入りリテラシーという語が内包する概念は非常に多様なものとなった。教育学研究の第70巻では、このリテラシーという語の教育学領域における概念的拡張を多角的に捉える特集を組んでいる。

例えば、上地（2003）は、批判的教育学的見地から、「義務教育において最低限の課題だと考えられているリテラシーの習得とは、そのももとの意味、すなわち、単純に文字の読み書きができる、自分の名前が書けるというレベルにとどまらず、具体的な社会生活の諸場面における適切な読み書きの使用法にまで拡張されている」と論じている。その例として、手紙を書くという行為を挙げ、手紙が書けるという行為は、社会における制度や文化を理解していることを意味し、リテラシーの具体的な社会生活における重要な役割は、文字の読み書きができることが社会における制度や文化を理解していることを反映するものであることを示唆するものであると考察している。

一方菊池（2003）は、記号的コミュニケーション論の立場から、人間がコミュニケーションの不可能性を理解する能力のひとつとしてリテラシーの機能を位置づけることにより、反覆可能性によるコミュニケーションの失敗の可能性を再考することの教育的営みにおける現代性を指摘している。

このように、19世紀末に公教育における読み書き能力として規定された「リテラシー」という概念は、近年、社会生活における制度や文化の理解に重要な役割を果たす能力として、あるいは、教育的コミュニケーションにおける反復可能性との関連性を説明する要因として、教育における現代的諸問題の多くを論ずる際のキーワードとして位置づけられるようになったといえる。

ここまで、リテラシーと批判的思考という、一般的には異なる概念として捉えられている2つの教育的専門用語について、それらの概念的定義ならびに問題解決における機能について比較を行ってきた。その結果、両者の概念的定義は、熟考を求められる日常的な問題解決場面において広く重要な役割を果たすという点において同様の意味合いを持っていることが明らかとなった。このことは、教育における現代的問題を検討する上で、児童生徒の思考力の中でも、とりわけ熟考する能力の重要性を多面的に裏付けるものであると考えられる。

児童生徒の熟考する力の育成に対する社会的要請

は、中教審答申等における記述にも見て取ることができ、本論文では、これまで取り上げてきたような新しいリテラシーが、PISA 型テストにおいて測定されていることを取り上げたい。

### PISA におけるリテラシーの位置づけ

PISA (Programme for International Student Assessment) は、OECD (Organization for Economic Cooperation and Development: 経済協力開発機構) が実施する国際的な学力到達度に関する調査「生徒の学習到達度評価」のことである。

PISA 調査の歴史的背景と意義は、国立教育政策研究所発行の「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果報告書」において、次のようにまとめられる。前節でも述べたように、20世紀は、教育を取り巻く社会経済的状況が大きく変化した。その顕在的現象のひとつに「グローバリゼーション」という語に象徴されるような、経済システムの世界化への急速な展開があることに異論はないだろう。グローバリゼーションの結果として、国際競争力を支える人的資源の確保に対する需要が高まったことに基づく、優れた人材の育成手段としての教育の重要性が認識されるようになった。ここでの教育に対する認識の変化とは、優れた人材を育成する質の高い教育の充実を目指すことを意味する。また、この認識の変化により、数量化した統計データによる指標による大量のデータの多角的な比較・分析が行われるようになった。そのような、国際的評価指標に対する必要性が高まったことが、PISA 実施の背景である。

PISA が、学習到達度の国際的評価指標の提供を目的として実施されていることに基づくならば、PISA で重要視されている調査項目や能力は、現行の学習到達度の国際的動向や今後の動向を知る上で非常に有用なものとなるだろう。本研究において、その機能を検討することを目指すリテラシーは、2003年調査において中心的に調査が行われた分野であり (国立教育政策研究所, 2003), 今後、さらに拡大・深化した調査が実施されることが予測される学力である。それでは、PISA におけるリテラシーの内容を概観する。

PISA で調査されているリテラシーは「数学的リテラシー」「読解リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決的リテラシー」の4つの概念によって構成される。

数学的リテラシーの概念的定義とは、「数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的に関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力」とであるとされる。要約すると、「数学が世界

で果たす役割を見つけ、理解する能力」「確実な数学的根拠にもとづき判断を行う能力」「数学に携わる能力」となる。

読解リテラシーの概念的定義とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」とであるとされる。PISA においては、読解リテラシーは3つの側面から特徴づけられている。

1. 読むテキストの形式 (連続型 (文と段落から構成されるテキスト。例えば、物語、解説など) と非連続型 (データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリクスなど。))
2. 読む行為のプロセス①テキストの中の (情報の取り出し) ②書かれた情報から推論してテキストの意味を理解する (テキストの解釈) ③書かれた情報を自らの知識や経験に関連づける (熟考・評価)
3. テキストが作成される用途・状況 テキストが作成された用途を (私的)、(公的)、(職業的)、(教育的) の4つに分類した。

科学的リテラシーの概念的定義は、「自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意思決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力」とであるとされる。科学的リテラシーは、次の3つの側面によって特徴づけられている。すなわち1. 科学的概念・知識 2. 科学的プロセス 3. 科学的状況・文脈である。

問題解決的リテラシーの概念的定義は、「問題解決の道筋が瞬時には明白でなく、応用加納と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけには存在していない、現実の領域横断的な状況に直結した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力」とであるとされる。すなわち、問題の状況が、現実のものであり、解決の道筋がすぐには明らかでなく、ひとつのリテラシー領域に限定されない場合に、問題に対処し解決する能力であると要約することができるだろう。

PISA は、リテラシー能力の4側面の測定を目的とし、2000年、2003年と調査が実施されている。このように、リテラシーは学習到達度の国際的指標として定着してきているように思われる。それでは、情報機器利用に関するリテラシーとは、PISA で規定されている4つのリテラシーとどのように関連するだろうか。

本研究で検討を試みるのは、主として情報リテラシーと読解リテラシーの関連である。ここでは、2つの側面から両者の関連性を述べる。まずひとつは、情報リテラシーと読解リテラシーの概念的関連性があげられる。情報リテラシーとは、情報手段の特性の理解と

目的に応じた適切な選択、情報の収集・判断・評価・発信の能力、情報および情報手段・情報技術の役割や影響に対する理解など、“情報の取り扱い”に関する広範囲な知識と能力のことをいう。一方、読解リテラシーは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力のことを指す。両者を並列すると、情報を目的に応じ適切に取り扱い、利用することが中心的な能力として位置づけられていることが分かる。このように、情報リテラシーと読解リテラシーの間には、概念的な関連性の存在を推定することができる。

次に、PISA にみられる出題形式と日常的な情報機器利用場面の関連性を仮定することができる。2000年実施のPISAの読解力測定の問題では、公共の場における落書きの処遇に関して、それをアートのひとつと見る立場と、精神的な公衆衛生を害すると見る立場というふたつの対立する主張を示し、回答者は、公共の場における落書きについて、問題として提示されたテキストにおけるそれらの主張を踏まえてどのように判断するかについて自由記述による回答を求めている。このような出題形式において、複数の対立する価値観を提示された状況においてそれぞれが独自の判断を導出する過程は、情報機器の目的に応じた適切な利用の判断過程(村田, 2002; 越智, 2000; 山内, 2003)と同様のものであることが仮定できる。

このように、情報リテラシーと読解リテラシーには概念的・測定的な関連性がある。ここで、読解リテラシーと情報リテラシーに関連が見られる場合は、読解リテラシーの育成により情報リテラシーの育成を期待することができる。あるいは、情報リテラシーの育成により読解リテラシーの育成を期待することができる。情報リテラシーは、情報機器の利用に関わるということから、現行のカリキュラムにおいては情報科目や情報に関連する科目等での学習が主体であると考えられる。同様に、読解リテラシーは、テキストからの学習(Kintsch, 1994)が主体となる国語科における学習が主体であったと考えられる。両者に関連が見られるならば、情報リテラシーと読解リテラシーの総合的な育成の可能性も仮定できる。

しかしながら、情報リテラシーと読解リテラシーは、どちらも2000年以降に議論されるようになったものであり、それらの機能や評価基準の精査は十分ではない。両者の概念的および機能的類似点と相違点については、今後の研究によって検証される必要がある。とりわけ、テスト等における数値的な評価については、両者ともに一般的な調査研究やテスト等における学習到達度の測定に耐え得るものとはいえない。例えば、PISAにおける読解力テストにおいては、先述の落書きに関する問題でも、回答者には、自由記述による回答を求めるが、採点はいくつかのチェックポイントを満たすものかどうか0か1で採点する、というようなものとなっている。このような評価法は、プロトコル分析の持つ思考過程の分析という利点を減ずるものであることが推察されるが、PISAの読解力テストにおけるプロトコルの持つ質的な側面も含めた評価法の開発については今後の研究を待つ必要がある。

そこで本研究では、情報リテラシーと関連する心理的要因の関係について検討を行うこととした。その際、教育心理学および教育工学領域における先行研究において、その信頼性と妥当性が確認されている測定尺度を用いて、情報リテラシーとの関連を検討することとした。本研究で用いる尺度は、批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)と情報活用能力実践尺度(高比良・坂元・森・足立・鈴木・勝谷・小林・木村・波多野・坂元, 2001)を用いることとした。本研究において、批判的思考態度と情報活用能力を取り上げた理由は、以下のものである。まず、批判的思考態度については、本論文の冒頭で述べたように、情報リテラシーとの機能的な関連性が認められる可能性があることによる。一方、情報活用能力は、文部省が1992年に、「情報教育に関する手引き」の中で提唱した情報処理能力のことである。高比良ら(2001)は、情報活用能力の定義として、「将来の高度情報化社会を生きるための、情報および情報手段を主体的に選択し活用する能力」としている。情報活用能力は、情報機器の適切な利用法の学習の必要性が検討されるようになって間もない時期に開発された用語であるが、このような歴史的経緯をふまえると、現行の情報リテラシー概念的定義の形成にも影響を及ぼすものであると考えられる。そこで、情

<sup>1</sup>情報マネジメント用語辞典によると、狭義には「コンピュータが操作できること」を意味し、コンピュータやネットワークの基礎的な理解から、コンピュータやソフトウェアの操作、データ作成・整理、インターネットでの情報検索能力、プログラミング能力などを含む。これは「コンピュータ・リテラシー」と呼ばれる。

広義には情報機器の操作能力だけでなく、「情報を活用する創造的能力」のことを指し、情報手段の特性の理解と目的に応じた適切な選択、情報の収集・判断・評価・発信の能力、情報および情報手段・情報技術の役割や影響に対する理解など、“情報の取り扱い”に関する広範囲な知識と能力のことをいう。

報活用能力と情報リテラシーに関連が見られた場合は、情報リテラシー課題の妥当性が確認される。本研究では、情報リテラシーを検討するために、沖林ら(2005)で用いた「情報モラル」について尋ねる項目を引き続き用いることとした。その理由としては、本研究で検討することを目的とする情報リテラシーは、情報機器の利用手続きに関する単なる知識にとどまるものではなく、情報機器の利用が目的に応じた適切な行動であるかの判断を求めるものであることに基づく。<sup>1</sup>

## 方法

**調査時期** 2006年12月下旬から2007年1月上旬にかけて実施した。

**調査対象者** 広島大学附属東雲中学校1・2年生ならびに附属東雲小学校5・6年生が調査対象者であった。なお、本論文では、紙面の都合により、東雲中学校の調査結果を記載する。

**調査用紙** 本研究では、次の質問項目を含む調査用紙を用いた。本研究で用いた質問紙のうち、1, 2, 3, 5を巻末に掲載した。

1. 情報機器利用状況に関する質問項目(沖林他, 2005)
2. 情報モラル項目(沖林他, 2005)
3. 情報活用能力実践尺度(高比良他, 2001)

本研究では、高比良ら(2001)の質問項目のうち、因子付加量の低い項目を除き、23項目を用いることとした。

4. 批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)
5. 読解リテラシー(PISA, 2000)

本研究では、PISA(2000)の問題文を国立教育政策研究所(2003)の報告書から引用し、本研究用に、質問文の教示等に、一部改変を施した。

**従属変数** 本論文では、上記質問項目のうち、1. 情報機器利用状況、2. 情報活用能力と批判的思考態度を従属変数とした。

## 結果と考察

**情報機器利用に関する質問項目の分析** 情報機器利用に関しては、問4「パソコンでインターネットを使うときは、家の人と一緒ですか」と問5「あなたの家では、パソコンでのインターネットの利用のしかた(利用時間など)は決められていますか」の2つの質問を設定した。問4、問5の結果をTable1, Table2に示す。

まず、問4の回答結果については、Table1を見ると、

学年、性別ともに回答数に違いは見られないことが分かる。また、回答選択肢は3の「いっしょにはやらない(一人で使っている)」が全体の約70パーセントを占めていること明らかとなった。しかしながら、2の「たまにいっしょのことがある」も全体の約30パーセントを占めている。以上の結果からは、パソコンでインターネットを使うときは、基本的には一人で使うが、たまにいっしょのこともある家庭も一定の割合を占めていることが示唆されたといえる。

次に、問5の回答結果については、Table2を見ると、学年、性別ともに回答数に大きな違いは見られないことが分かる。また、回答選択肢は2の「(インターネットの利用のしかたは)決められていない」が全体の約80パーセントを占めている。以上の結果からは、家庭でのパソコンによるインターネットの利用の仕方については、基本的には決まりごとなどはないことが示唆されたといえる。しかしながら、中学1年生の女子の回答においてのみ、回答選択肢1「決められている」に対する回答比率が他のカテゴリよりも多いという結果も得られている。

この2つの質問に対する結果を踏まえると、学年や性別に関係なく、インターネットの利用については、各家庭において、それぞれが自由に利用しているという実態が明らかにされたといえるだろう。

Table1 問4の学年、性別毎の回答度数

回答	学年	性別		合計
		男子	女子	
1	1年生	4	1	5
	2年生	0	1	1
	合計	4	2	6
2	1年生	7	13	20
	2年生	8	18	26
	合計	15	31	46
3	1年生	21	26	47
	2年生	27	19	46
	合計	48	45	93

Table2 問5の学年、性別毎の回答度数

回答	学年	性別		合計
		男子	女子	
1	1年生	6	11	17
	2年生	4	6	10
	合計	10	17	27
2	1年生	27	29	56
	2年生	31	31	62
	合計	58	60	118

**情報リテラシーと情報活用能力との関連** 次に、情報リテラシーと情報活用能力ならびに批判的思考態度の関連について検討する。

情報リテラシーは、以下のような場面を想起させる会話文を読むように教示した。まず、友だちがインターネットの匿名性を利用した、他人へのなりすましについて誘惑し、回答者は、それを聞いてどのように思うかについて、多肢選択形式で回答するというものである。回答選択肢は、具体的には、1「賛成する」、2「賛成しない」、3「自分だということがばれるかもしれないと思う」、4「わからない」の4つである。

まず、情報リテラシーと情報活用能力との関連についての分析結果を述べる。調査対象者全体の各回答選択肢の情報活用能力得点の平均値と標準偏差を算出した。

各回答選択肢別の情報活用能力得点を、Figure1に示す。回答選択肢を要因とする1要因分散分析を実施した結果、主効果が見られた( $F(3.142) = 3.66, p < .05$ )。主効果が見られたため多重比較を行った結果、選択肢2を選択した回答者の情報活用能力が他の3つの選択肢を選択した回答者よりも有意に情報活用能力が低いことが示された(全ての比較において5パーセント水準で有意であった)。回答選択肢2は、「賛成しない」というものである。すなわち、友だちから匿名性の悪用の誘惑を持ちかけられる場面に遭遇しても、情報活用能力が低いものは、友だちの誘惑に賛成しないという行動を選択することが明らかとなった。

次に、情報リテラシーと批判的思考態度得点の関連についての分析結果を述べる。調査対象者全体の各回答選択肢の批判的思考態度得点の平均値と標準偏差を算出した。各回答選択肢別の批判的思考態度得点を

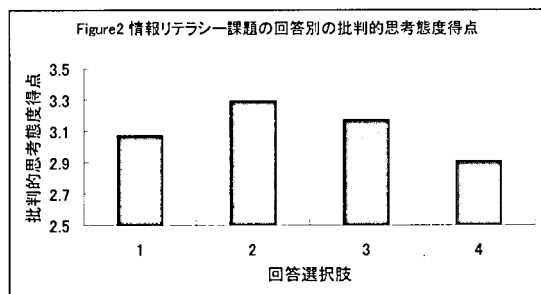
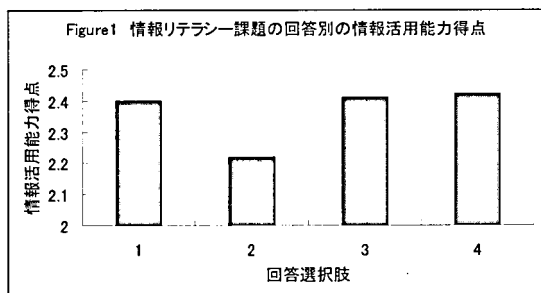
Figure2に示す。回答選択肢を要因とする1要因分散分析を実施した結果、主効果の有意傾向が見られた( $F(3.141) = 2.59, p < .1$ )。主効果が見られたため多重比較を行ったところ、回答選択肢2を選択した回答者の批判的思考態度得点が選択肢4の回答者よりも高いことが明らかとなった。回答選択肢2は「賛成しない」であり、選択肢4は「わからない」というものである。すなわち、友だちから匿名性の悪用の誘惑を持ちかけられる場面に遭遇した場合、賛成しないという行動を選択するものは、行動を選択できないものよりも批判的思考態度が高かった。

## まとめ

本研究は、情報リテラシーの認知的基盤を明らかにすることを目的としたものである。そのための手法として、情報リテラシー課題(沖林他, 2005)と、関連する要因としての情報活用能力(高比良他, 2001)や批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)との関連を検討した。本研究の結果は以下のようにまとめられる。

まず、情報リテラシーと情報活用能力との関連についてまとめる。情報活用能力については、適切な行動を選択したものは、他の行動を選択したものよりも情報活用能力が低いことが明らかとなった。この結果は、予測と異なるものであるといえる。この結果に関する解釈としては、次の2通りが考えられる。まずひとつは、情報リテラシーと情報活用能力は正の相関を持たないというものである。この場合、情報リテラシーを情報活用能力が発展したものと位置づけることは不適切であると解釈される。もうひとつの解釈は、本研究において情報リテラシーの側面として位置づけた情報モラル課題が情報活用能力とは正の相関を持たないということである。この場合には、情報モラルと情報リテラシーの関係について、今後検討を進めていく必要があるだろう。

次に、情報リテラシーと批判的思考態度尺度の関連についてまとめる。本研究の結果から、匿名性の悪用に関する適切な行動を選択したものは、どのような行動も選択しなかったものよりも批判的思考態度が高いことが明らかとなった。本研究の結果からは、適切な行動と不適切な行動の選択の間には批判的思考態度得点に有意な差は見られなかった。しかしながら、このことは、平山ら(2004)の批判的思考態度尺度が、多くの情報ソースから信念バイアスなどにとらわれず自分なりの結論を導出する、という定義に基づいて作成されたことを考え合わせると妥当であるといえる。ただし、この場合においても、行動選択の場面において、



分からないという行動はどのような判断に基づくものなのかについての検討が必要であると考えられる。

## 引用文献

- 平山るみ・楠見孝 2004 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いての検討— 教育心理学研究, 52, 186-198.
- 廣岡秀一・小川一美・元吉忠寛 2000 クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 三重大学教育学部研究紀要, 51, 161-173.
- Kadash, C. M., & Scholes, R. J. 1996 Effects of preexisting beliefs, epistemological beliefs, and need for cognition on interpretation of controversial issues. *Journal of Educational Psychology*, 88, 260-271.
- Kintsch, W. 1994 Text comprehension memory, and learning. *American Psychologist*, 49, 294-303.
- 菊池久一 2003 〈構成する活動〉としてのリテラシー 教育学研究, 70, 336-347.
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6, 184-192.
- 国立教育政策研究所(編) 2004 生きるための知識と技能2 OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査国際結果報告書 ぎょうせい
- 道田泰司 2000 批判的思考研究からメディア・リテラシーへの提言・コンピュータ&エデュケーション, 9, 54-59.
- 道田泰司 2003 批判的思考概念の多様性と根底イメージ 心理学評論, 46, 617-639.
- 村田育也 2002 情報活用のための情報処理論 大学教育出版
- 永井昌寛・清水大・奥田隆史 2005 情報リテラシ授

業における学生アンケートによる能力別クラス分けの検討 日本教育工学論文誌, 29 (suppl.), 225-228.

- 越智貢・土屋俊・水谷雅彦(編) 2000 情報倫理学 電子ネットワーク社会のエチカ ナカニシヤ出版
- 沖林洋平・神山貴弥・西井章司・森保尚美・川本憲明・鹿江宏明・森敏昭 2005 児童生徒における情報倫理意識と一般的規範意識の関係 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, 34, 111-122.
- 佐藤学 2003 リテラシーの概念とその再定義 教育学研究, 70, 292-301.
- Sá, W. C., West, R. F., & Stanovich, K. E. 1999 The domain specificity and generality of belief bias: Searching for a generalizable critical thinking skill. *Journal of Educational Psychology*, 89, 342-357.
- 齋藤ひとみ・三輪和久 2001 WWWの情報探索における人間の行動プロセスの実験的検討 電子情報通信学会技術研究報告 *IEICE Technical Report (ET2001-14)*, 101(115), 23-28.
- 齋藤ひとみ・三輪和久 2002 WWWの探索活動における自己モニタリング支援システムの試作 電子情報通信学会技術研究報告 *IEICE Technical Report (ET2002-4)*, 102(65), 19-23.
- 高比良美詠子・坂元章・森津太子・坂元桂・足立にれか・鈴木佳苗・勝谷紀子・小林久美子・木村文香・波多野和彦・坂元昂 2001 情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 日本教育工学論文誌, 24, 247-256.
- 上地完治 2003 批判的教育学におけるリテラシー 教育学研究, 70, 325-335.
- 山内祐平 2003 デジタル社会のリテラシー 「学びのコミュニティ」をデザインする 岩波書店

資料 本研究で使用した調査用紙（抜粋）

情報活用能力実践尺度（高比良他，2001）の短縮版

以下の質問を読んで、それぞれの質問項目について、自分が最も当てはまると思う番号にマルをつけてください。

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1. 物事を人とは違う観点から考えてみるほうである。	1	2	3	4
2. 課題をやるときは、人のまねをすることが多い。	1	2	3	4
3. 人から聞いた話が本当かどうかを、あとで確かめることはない。	1	2	3	4
4. たくさんさんの情報を集めたときは、似た内容ごとに分類するようにしている。	1	2	3	4
5. 友達に連絡をするときは、用件に応じて手紙や電話、ファックスなどを使い分ける。	1	2	3	4
6. 筆者が一番言いたいことを把握するのは苦手である。	1	2	3	4
7. 興味を持った事柄については、徹底的に情報を集める。	1	2	3	4
8. 授業でわからないことがあっても、先生に質問したり、教科書や参考書で調べることはほとんどない。	1	2	3	4
9. 長い文章でも、その要点はたいい理解できる。	1	2	3	4
10. 人と話すとき、相手が何を知りたがっているか考えないほうである。	1	2	3	4
11. 人の意見に流されやすい方である。	1	2	3	4
12. 集めた情報は、整理しないでそのままにしておくことが多い。	1	2	3	4
13. 分からない事柄があったら、辞書や辞典をひくようにしている。	1	2	3	4
14. 意見がたくさんあっても、うまくまとめることができる。	1	2	3	4
15. 手に入れた情報が古くなっていないかどうか注意している。	1	2	3	4
16. 場所の説明は、図示せずに言葉だけで済ますことが多い。	1	2	3	4
17. 資料は自分で集めずに、友達からもらって済ますことのほうが多い。	1	2	3	4
18. 対立する意見があるときはいつも両方の言い分を聞いて、それぞれの良し悪しを判断するようにしている。	1	2	3	4
19. 人のうわさをすぐ信じるほうだ。	1	2	3	4
20. 文章を読むとき、重要なところに線を引くことはあまりない。	1	2	3	4
21. 小さな子と話すときには、難しい言葉を使わないように気をつけている。	1	2	3	4
22. 調べたことを整理するとき、文章だけでなく図や表も活用するよう心がけている。	1	2	3	4
23. 問題を解くとき、筋道を立てて考えるよりは、思いつきで結論を出す。	1	2	3	4



これから、落書きに関する2つの手紙の文章を読んでいただきます。2つの文章は、それぞれ別のひとが書いたものです。落書きとは、壁など所かまわずに書かれる違法な絵や文章です。2つの文章を読んで、落書きについて自由に考えてください。この文章を読んで、問1~4に答えてください。

### 1. ヘルガの手紙

学校の壁の落書きに頭に来ています。壁から落書きを消して塗り直すのは、今度が4度目だからです。想像力という点では見上げたものだけけれど、社会に余分な損失をさせないで、自分を表現する方法を探すべきです。

禁じられている場所に落書きするという、若い人たちの評価を落とすようなことを、なぜするのでしょうか。プロの芸術家は、通りに絵をつるしたりなんかしないで、正式な場所に展示して、金銭的援助を求め、名声を獲得するのではないのでしょうか。

わたしの考えでは、建物やフェンス、公園のベンチは、それ自体がすでに芸術作品です。落書きでそうした建築物を台無しにするというのは、ほんとに悲しいことです。それだけではなくて、落書きという手段は、オゾン層を破壊します。そうした「芸術作品」は、そのたびに消されてしまうのに、この犯罪的な芸術家たちはなぜ落書きをして困らせるのか、本当にわたしには理解できません。

ヘルガ

### 2. ソフィアの手紙

十人十色。人の好みなんて様々です。世の中にはコミュニケーションと広告であふれています。企業のロゴ、お店の看板、通りに面した大きくて目ざわりなポスター。こういうのは許されるのでしょうか。そう、大抵は許されます。では、落書きは許されますか。許せるという人もいますが、許せないという人もいます。

落書きのための代金はだれが払うのでしょうか。誰が最後に広告の代金を払うのでしょうか。その通り、消費者です。

看板を立てた人は、あなたに許可を求めましたか。求めています。それでは、落書きをする人は許可を求めなければなりませんか。これは単に、コミュニケーションの問題ではないのでしょうか。あなた自身の名前も、非行少年グループの名前も、通りで見かける大きな製作物も、一種のコミュニケーションではないかしら。

数年前に見かけた、しま模様やチェックの柄の洋服はどうでしょう。それにスキーウェアも。そうした洋服の模様や色は、花模様が描かれたコンクリートの壁をそっくりそのまま真似たものです。そうした模様や色は受け入れられ、高く評価されているのに、それと同じスタイルの落書きが不愉快とみなされてしまうなんて、笑ってしまいます。

芸術多難の時代です。

前ページの2通の手紙は、落書きについての手紙で、インターネットから送られてきたものです。落書きとは、壁など所かまわずに書かれる違法な絵や文章です。この手紙を読んで、問1~4に答えてください。

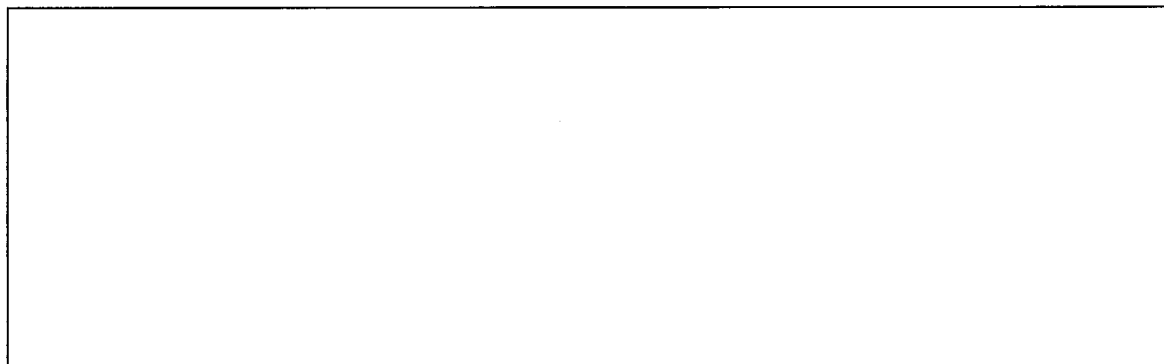
#### 落書きに関する問1

この二つの手紙のそれぞれに共通する目的は、次のうちどれですか。次のAからDのうち、当てはまると思うものひとつの記号にマルをつけてください。

- A 落書きとは何かを説明する。
- B 落書きについての意見を述べる。
- C 落書きの人気を説明する。
- D 落書きを取り除くのにどれほどお金がかかるかを人びとに語る。

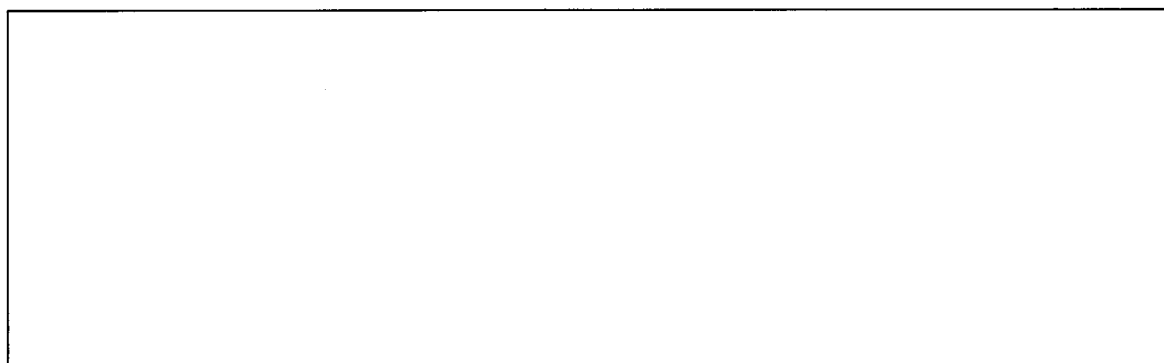
## 落書きに関する問2

ソフィアが広告を引き合いに出している理由は何ですか。思いつく理由を、自分なりの言葉を使って、下の四角の中に自由に書いてください。



## 落書きに関する問3

あなたは、この2通の手紙のどちらに賛成しますか。片方あるいは両方の手紙の内容に触れながら、自分なりの言葉を使って、あなたの考えを下の四角の中に書いてください。

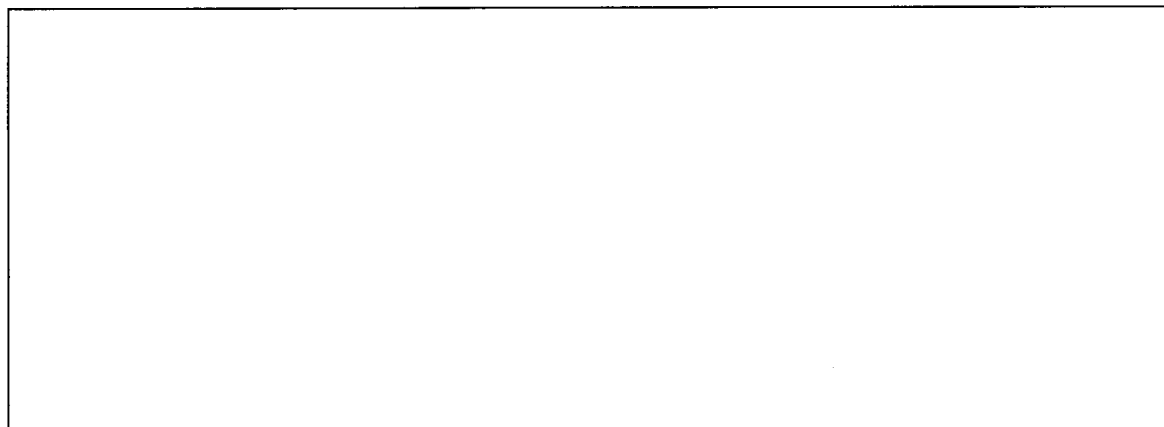


## 落書きに関する問4

手紙に何が書かれているか、内容について考えてみましょう。

手紙がどのような書き方で書かれているか、スタイルについて考えてみましょう。

どちらの手紙に賛成するかは別として、あなたの意見では、どちらの手紙がよい手紙だと思いますか。片方あるいは両方の書き方にふれながら、自分なりの言葉を使って、あなたの考えを下の四角の中に書いてください。



以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。